

「リベラルアーツの醸成は図書館から」

経営学部助教授 小 浜 ふみ子



近年、大学では学生に対して「本を読もう」との啓蒙運動が盛んである。若者の読書離れに危機感を覚える大人が多いことは事実である。ここでは、「若者たちよ、書を読んでまちに出よう。大人たちよ、若者にどんな本をどのように読むのか伝えよう」というメッセージを送ろう。メッセージの基底にあるのは、リベラルアーツの醸成である。リベラルアーツとは、専門教育に入る前の予備教育としての一般教育ではなく、「学問全体を貫いている哲学的な精神を喚起する」ためのものであり、アメリカの教育に照らしていうならば「人生の準備」「柔軟な心性」をもった人格形成を目標としている。

かつて私は、講義の中で小説を引用することがよくあった。例えば、『赤と黒』、『ヴェニス商人』『若きウェルテルの悩み』、『セールスマンの死』、『ライ麦畑でつかまえて』等々である。ところがそれらはほとんど空振りだった。若者と接点がありそうな現代的な作家で、芥川賞・直木賞受賞作品を持ち出しても結果はほとんど同じだった。小学生の時から読まなければならない本は序列しており、大学生になればそれらの知識は共有されていると思い込んでいた私がうかつであった。次に、若者たちは映像の時代に生まれてきたのだから映画やビデオにあるものを使えばわかるだろうと考えた。『ゴッドファザー』、『マイフェアレディ』、『モダンタイムス』『クレイマー・クレイマー』、『シンドララーのリスト』、『ディア・ハンター』、『ゼブン・イヤーズイン・チベット』、『羅生門』、

『生きる』、『八つ墓村』、『檀山節考』、『男はつらいよ』等々。しかし、残念なことに映像も図書に負けにくいくらい空振りだった。学生たちの多くは、読書の習慣も、映像へのアクセスもこれまでの学校生活の中で学習してこなかったし、友人関係のなかで交流する手段ともなりえなかったのだ。この傾向は本学だけではないようである。「わかりやすい本」を教えてほしいとの訴えは、他大学の学生でも同じである。

今時のレジャーランド化した大学の顧客学生は、コツコツと努力を重ねて必要な知識を学ぶことより、なるべく簡便に自分の要求に一致したデータ（即役に立つ）を手に入れようとする。ファーストフード的な「楽しみ」の追求が日常生活に浸透している若者たちには、読書による人格の養成など想像もつかないかもしれない。「マンガで読む～」がもてはやされている時代である。1年間に4万冊以上の新刊が発行され、インターネットでは地球の反対側の情報に即座にアクセスできる時代である。氾濫する情報をすべて獲得・消費することは不可能である。異常な過剰負荷環境（人間が処理できる限界を超える大量の刺激に囲まれている）に耐えるために人間は重要ではないと自分で判断した情報の入力を極力避けようとする。だが、時勢に任せておいていいのであろうか。

社会科学の古典を読むように勧めると、「ちょっと読んで分らなかったから」と諦めてしまう学生がいる。「訳者は50回以上読んでいるが、その



度に新たな発見があると述べているから、私たちが1度で分からないのは当然だろう」という私の顔をいぶかしげに見ている。学生の中には、「古典的教養は世の中に出てどのように役立つかわからない」と尋ねる者もいる。私は「ワインのようにまず自分の中でゆっくり熟成させなさい。ワインの栓を抜いてひと呼吸して香りが立つまでテイステイングを待つでしょう。それと同じようにあなたがどのように生きるか考えるとき、あなた自身の考えや声となるまで待ちなさい」と真面目に答えるが、学生はますます困惑した顔になってしまう。しかし、講義を進めていくうちに、「ああ、そうなんだ!」とある文脈を捉えて面白味を得た学生は最後まで読み通し、次には自分で挑戦すべき文献を見つけてくる。

ところで、学生たちは自分たちの読むべき本の指針が示されなかったことに対して不安も抱いている。学生たちは、こう指摘する。教育制度の「ゆとり」が「ゆるみ」につながっている、「個性を活かす」教育が結果として「個性のない人間」を生んでいると。教育と

社会構造との関係を問う答案には、「自由に、主体的に学べという教育方針はやめてほしい。必要とされる基礎知識ははっきりと示してほしい」との声も少なくなかったことを加えておこう。

教員たちは、「自分の好きな本を自由に読め」ではなく、最初は入門書やガイドブックではなく、難しくても「原典を読みなさい」と伝え、次にはこれと体系的な勉強を支援するような読書を勧めるべきである。小人数教室では、「眼光紙背に徹する」ような読み方を教えることも可能だろう。それと同時に、ブラウジングで思いがけない本を見つけたこと、当たり外れがあったこと、珍しいビデオを発見したこと等自分たちの図書館遍歴を積極的に伝えよう。図書館には、分野ごとの基本文献や新入生向けの文献コーナーを設けてもらうのはどうだろうか。よく利用され、人々の交流の場にもなっている公共図書館は施設の充実もさることながら、職員や熱心な利用者層が、人々の文化的コミュニティを創る仕掛けを常に考えていることを付言しよう。

西條八束・紀子 スケッチ展



長白山瀑布

西條八束



アンスリウムが咲いた

西條紀子